

Ⅱ. 盲・聾・養護学校に関する結果及び考察

1. 基本情報

(1) 回収率

盲・聾・養護学校からは合計 239 の回答が得られた。学校種の発送数、回答数と回収率は表Ⅱ－1 に示したとおりである。

表Ⅱ－1 盲・聾・養護学校の回収状況

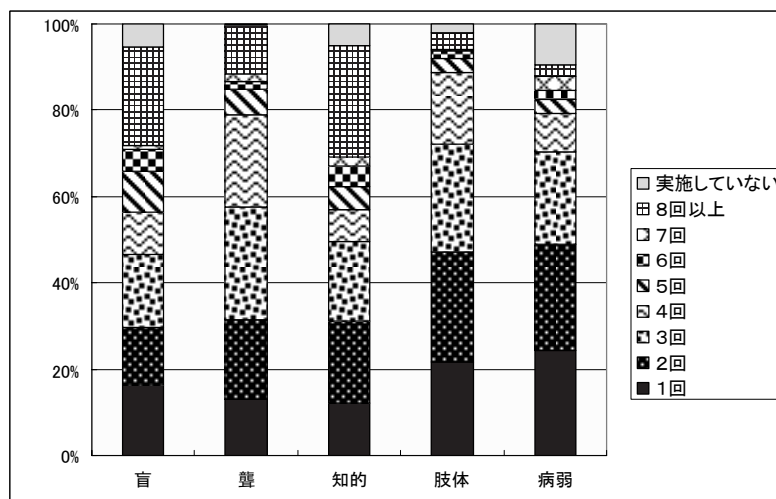
	発送数	回収数	回収率
盲学校	49	47	95.9%
聾学校	48	47	97.9%
知的障害養護学校	54	52	96.3%
肢体不自由養護学校	54	50	92.6%
病弱養護学校	46	43	93.5%

(2) 交流及び共同学習の実施状況

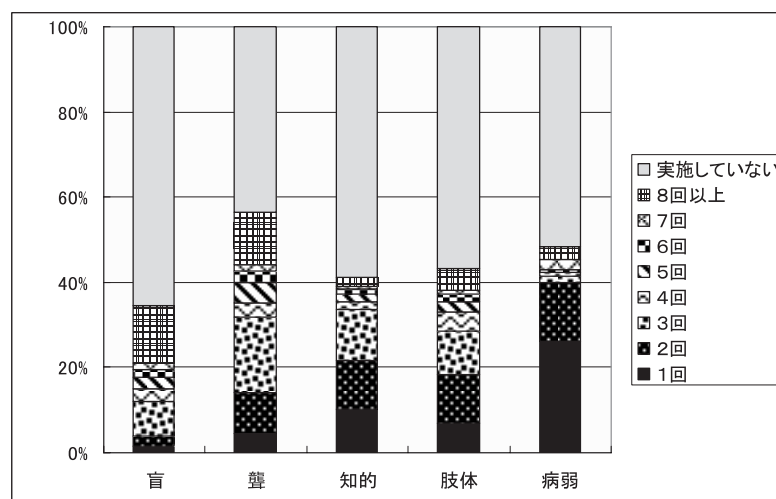
平成 17 年度交流及び共同学習の実施回数について、回数毎に該当する児童・生徒数の記入を求めた。その結果を学校種毎に合計し、割合を示したものが、図Ⅱ－1 から図Ⅱ－4 である。

小学部の学校間交流(図Ⅱ－1)は、全ての学校種で9割以上の児童が実施していた。このうち、盲学校、聾学校、知的障害養護学校では、年間8回以上実施している児童も多く見られた。一方、肢体不自由養護学校や病弱養護学校では、年間3回まで実施している児童が7割程度を占めていた。

小学部の居住地校交流(図Ⅱ－2)は、4割から6割弱の児童が実施していた。盲学校、聾学校では、年間8回以上という児童も多く見られるが、全体として、3回以下の児童が多かった。



図Ⅱ－1 小学部学校間交流の実施状況

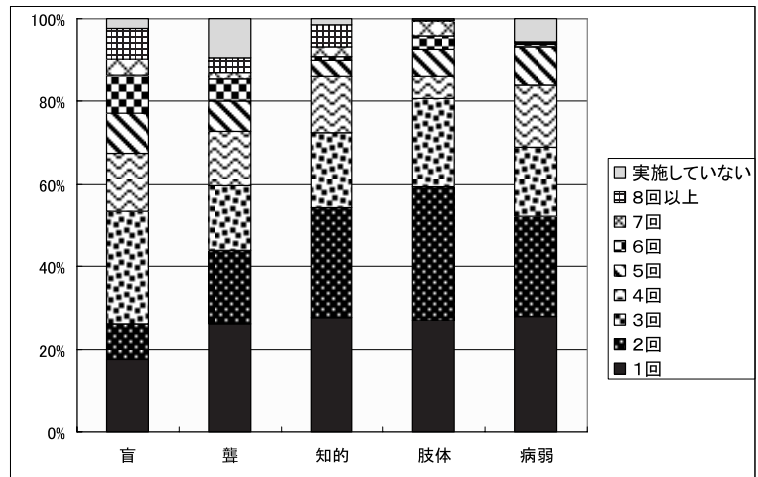


図Ⅱ－2 小学部居住地校交流の実施状況

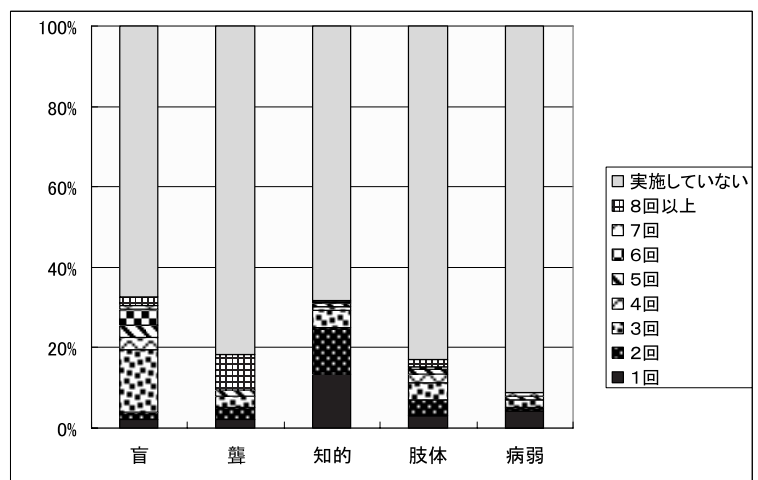
中学部の学校間交流(図Ⅱ-3)は、全ての学校種で9割以上の生徒が実施していた。実施回数は、年間3回以下が6割から8割と多く4回以上という生徒は少なかった。

中学部の居住地校交流(図Ⅱ-4)は1割から3割の生徒が実施していた。実施回数は年間3回以下がほとんどであるが、聾学校では8回以上に生徒が多く回答されていた。

全体として、学校間交流は小学部、中学部とも9割以上の児童生徒が実施していた。一方、居住地校交流は小学部で4割から6割弱程度、中学部では1割から3割程度の児童生徒が実施していた。年間の実施回数は、小学部の方が中学部より多い傾向が見られた。



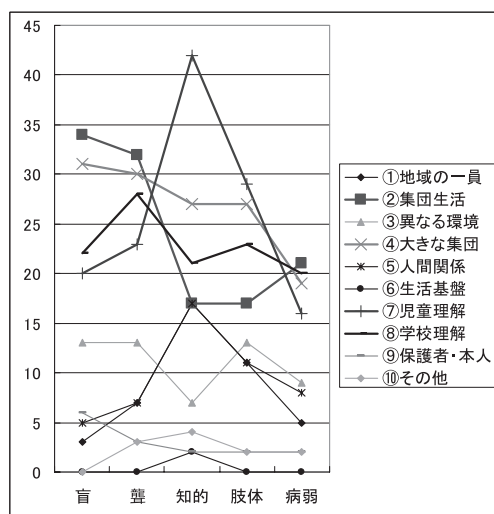
図Ⅱ-3 中学部学校間交流の実施状況



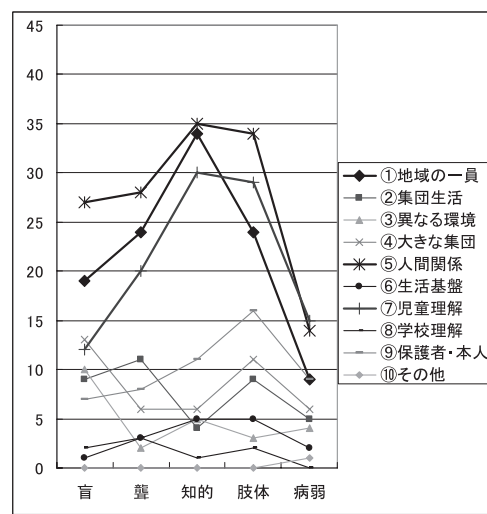
図Ⅱ-4 中学部居住地校交流の実施状況

(3) 目的・ねらい

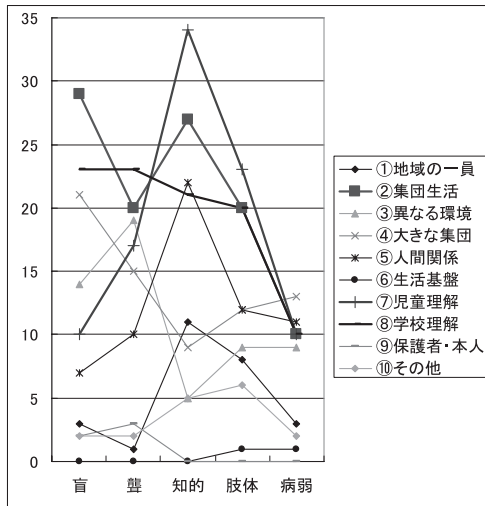
交流及び共同学習の目的・ねらいについて、その他を含む10の選択肢から3つ選択して回答するよう求めた。図Ⅱ-5から図Ⅱ-8は、学校種毎に回答数を示したものである。



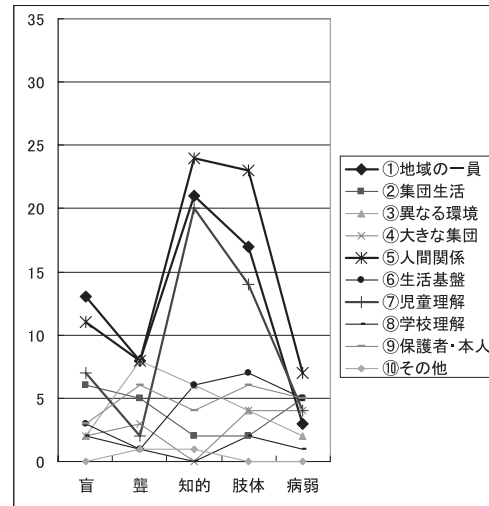
図Ⅱ-5 小学部学校間交流の目的



図Ⅱ-6 小学部居住地校交流の目的



図Ⅱ-7 中学部学校間交流の目的



図Ⅱ-8 中学部居住地校交流の目的

小学部学校間交流(図Ⅱ-5)では、全体として「②集団生活で社会性を培う」「④大きな集団での学習を経験し、学ぶ力を培う」「⑦児童生徒について理解してもらう」「⑧盲・聾・養護学校について理解してもらう」が多く回答された。このうち、盲学校、聾学校では「②集団生活で社会性を培う」が多く、知的障害養護学校、肢体不自由養護学校では「⑦児童生徒について理解してもらう」が多かった。

小学部居住地校交流(図Ⅱ-6)では、全体として「⑤地域でのつながりや人間関係を形成する」「①地域の一員であることをお互いに確認する」「⑦児童について理解してもらう」が多く回答された。

中学部学校間交流(図Ⅱ-7)では、「②集団生活で社会性を培う」「④大きな集団での学習を経験し、学ぶ力を培う」「⑧盲・聾・養護学校について理解してもらう」「⑦児童生徒について理解してもらう」が多く回答され、小学部学校間交流と同様の傾向であったが、盲学校、聾学校では「③異なる環境での適応能力を培う」も多く回答された。また、知的障害養護学校や肢体不自由養護学校では、「⑤地域でのつながりや人間関係を形成する」も多く回答された。

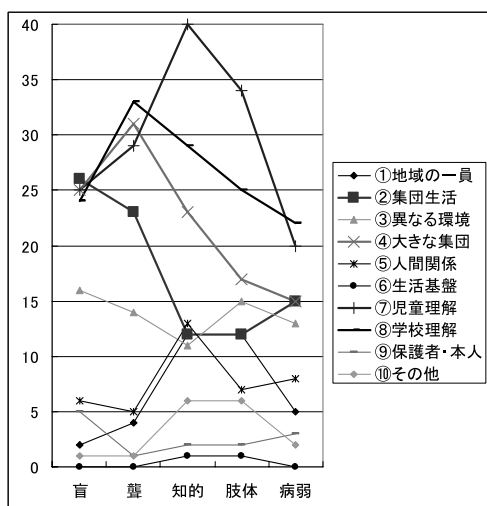
中学部居住地校交流(図Ⅱ-8)では、「⑤地域でのつながりや人間関係を形成する」「①地域の一員であることをお互いに確認する」「⑦児童について理解してもらう」が多く回答され、小学部居住地校交流とほぼ同様の傾向であった。

(4) 成果

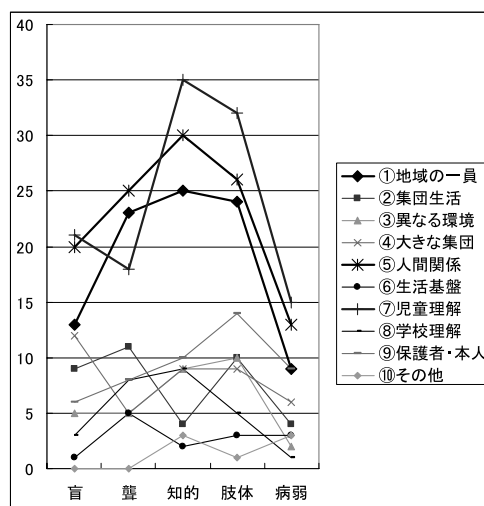
交流及び共同学習の成果について、その他を含む10の選択肢から3つ選択して回答するよう求めた。図Ⅱ-9から図Ⅱ-12は、学校種毎に回答数を示したものである。

小学部学校間交流で(図Ⅱ-9)は、全体として「⑦児童生徒について理解してもらえた」「⑧盲・聾・養護学校について理解してもらえた」「④大きな集団での学習を経験し、学ぶ力を培うことができた」「②集団生活で社会性を培うことができた」が多く回答された。目的・ねらいと同様の傾向であった。このうち盲学校、聾学校では「②集団生活で社会性を培うことができた」が多く、知的障害養護学校や肢体不自由養護学校では「⑦児童生徒について理解してもらえた」が多かった。これらの傾向は目的・ねらいの結果

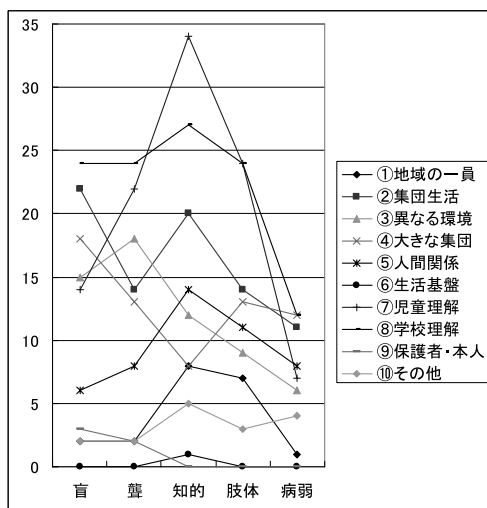
と同様であった。



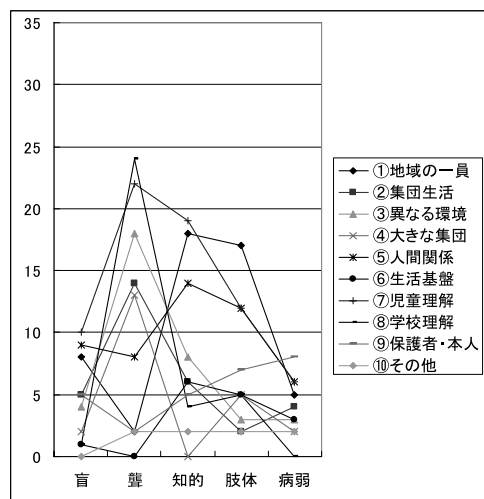
図Ⅱ-9 小学部学校間交流の成果



図Ⅱ-10 小学部居住地校交流の成果



図Ⅱ-11 中学部学校間交流の成果



図Ⅱ-12 中学部居住地校交流の成果

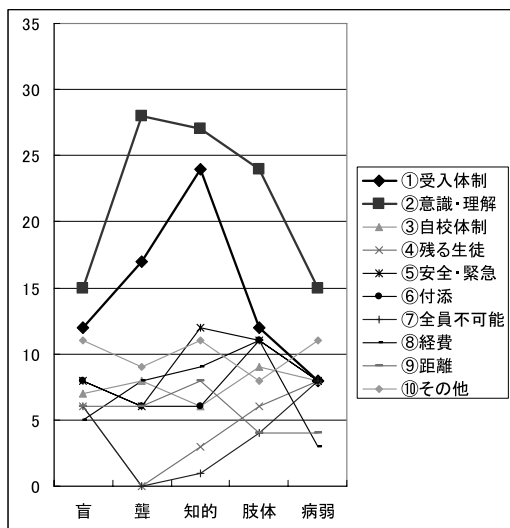
小学部居住地校交流(図Ⅱ-10)では、全体として「⑦児童について理解してもらえた」「⑤地域でのつながりや人間関係を形成することができた」「①地域の一員であることを互いに確認できた」が多く回答され、これらの傾向は目的・ねらいと同様であった。

中学部学校間交流(図Ⅱ-11)では、「⑧盲・聾・養護学校について理解してもらえた」「⑦児童生徒について理解してもらえた」「②集団生活で社会性を培うことができた」「④大きな集団での学習を経験し、学ぶ力を培う」が多く回答され、盲学校、聾学校では「③異なる環境での適応能力を培うことができた」も多く回答された。これらの傾向は目的・ねらいと同様であった。

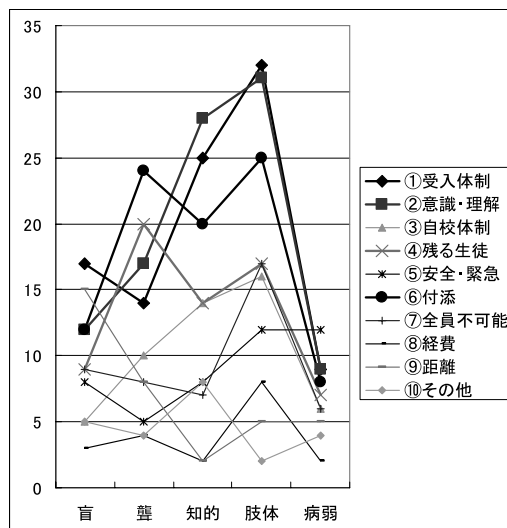
中学部居住地校交流(図Ⅱ-12)では回答が分散し傾向を見いだすことができなかった。

(5) 課題

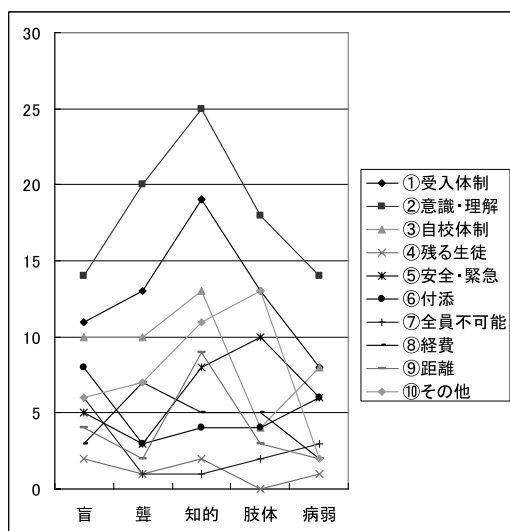
交流及び共同学習を実施しての課題について、その他を含む10の選択肢からあてはまるものの全てを選択して回答するよう求めた。図Ⅱ-13から図Ⅱ-14は、学校種毎に回答数を示したものである。



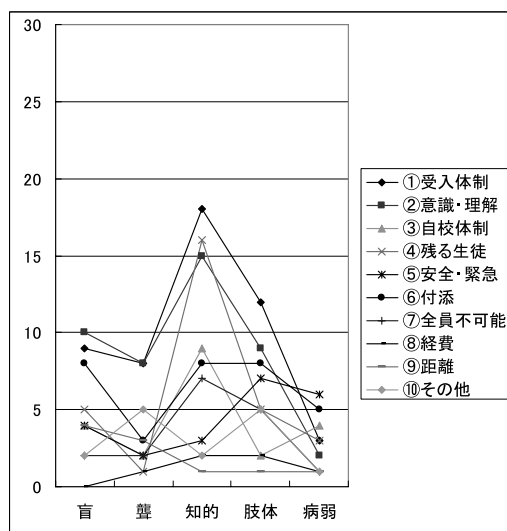
図Ⅱ-13 小学部学校間交流の課題



図Ⅱ-14 小学部居住地校交流の課題



図Ⅱ-15 中学部学校間交流の課題



図Ⅱ-16 中学部居住地校交流の課題

小学部学校間交流(図Ⅱ-13)では、全体として「②実施相手校の意識・理解について」「①実施相手校の受け入れ体制」についての2選択肢の回答が多かった。

小学部居住地校交流(図Ⅱ-14)では、「①実施相手校の受け入れ体制」「②実施相手校の意識・理解について」に加えて「⑥付き添い(送迎も含む)の問題」「④学校に残る児童生徒の対応について」も多く回答された。このうち「①実施相手校の受け入れ体制について」が多かったのは、盲学校と肢体不自由養護学校であった。「②実施相手校の意識・理解について」は知的障害養護学校に多く、「⑥付き添い(送迎も含む)の問題」は聾学校で多かった。病弱養護学校では「⑤安全確保・緊急対応の問題」が多かった。

中学部学校間交流(図Ⅱ-15)では、全体として「②実施相手校の意識・理解について」「①実施相手校の受け入れ体制」についての2選択肢の回答が多かったが、「③自校(校内)の体制について」も多く回答された。

中学部居住地校交流(図Ⅱ-16)でも、病弱養護学校を除いて「②実施相手校の意識・理解について」「①実施相手校の受け入れ体制」についての2選択肢の回答が多かったが、盲

学校では「⑥付き添い(送迎も含む)の問題」が、知的障害養護学校では「④学校に残る児童生徒の対応について」も多く回答された。病弱養護学校では「⑤安全確保・緊急対応の問題」「⑥付き添い(送迎も含む)の問題」の順で回答が多かった。

(久保山茂樹)